

聞き手に対する敬語行動の理論

荻野綱男

キーワード=聞き手・敬語行動・理論・モデル・丁寧さ

要旨

聞き手に対する敬語行動は、これこれの場面に対してはこれこれの表現を使うという形で記述できるが、一般に、一つの場面で複数の表現が使用可能である。そのような状況の全体を説明する敬語行動理論は、すでに経験した「場面」だけでなく、初めて体験する「場面」でもその場にふさわしい表現はこれであるということが導き出せるような「一連の手続き」でなければならない。

聞き手に対する敬語行動は、「丁寧さ」という一次元的な数値によって説明できる。場面に対する「丁寧さ」と、表現の丁寧さに関する「平均値」と「標準偏差」を用いると、正規分布曲線および使用頻度情報を当てはめることによって、過去の調査のデータ（ある丁寧さの場面におけるそれぞれの表現の出現傾向）が近似できるとともに、このしくみによって、調査した場面以外の「ある丁寧さ」を持った場面でのそれぞれの表現の出現する割合を予測することができる。そのようなコンピュータプログラムを作成し、実験したところ、高い精度で敬語行動を実際に予測することができた。

1. 理論とモデル

理論とはどんなものかという問題については、多くの議論があり、なかなか一致をみないが、筆者は次のように考えている。敬語行動の理論というのは、すでにわかっている人間の敬語行動についての観察結果を一般化してルールにしたもので、過去の人間の敬語行動を説明できるとともに、今後の敬語行動を予測できることが必要である。

一方、モデルとは「考え方の枠」であり、とりあえず仮定されただけのものも「モデル」である。モデルと対比して理論を考えると、理論はモデルがさらに発展したものととらえられる。モデルが証明・確認されるとともに、手順が明確化されたり具体的な数値が決定されたりして未知の事態に対する「予測」までが行なえるようになったものが理論である。

常識のようなものまで「土着の理論」とみる見方もあるが、筆者はそうは考えない。理論は、検証を経たあとに作られるものであって、研究を始める前に存在するものではない。さらに、理論は、コンピュータプログラムで実現できる、つまり実行可能=計算可能でなければならないと考える。敬語行動に際し考慮する必要のある要素を列挙したものは、「理論」と呼ぶにふさわしくない。それは「モデル」である。どの要素がどのくらいの重みで、

(28) 聞き手に対する敬語行動の理論

あるいはどういう順序で働いているのかを定式化しなければ「理論」とはいえない。たとえば、ある変数 x と y の関係について、 $y=ax+b$ の式で表わされるものはモデルであり、なんらかの手順で a と b の値が決定され、 $y=4.345x+0.384$ のようになったときに、それは理論と呼ばれる資格を持つ。

「理論」ができれば、それはコンピュータに入れて実際に「応用する」ことができる。すなわち、いろいろな条件でその「理論」の働き具合（ふるまい）を調べることができる。これをコンピュータによる「実験」と呼ぶ。このような「実験」（およびその結果による検証）が可能になってはじめて理論と呼ぶことができる。

筆者の研究目標は、人間の（特に日本人の）敬語行動の解明である。すなわち、日本語の敬語が（人間と同様に）上手に使えるロボットを作ること、ないし、それと同価値のことだが、そのようなロボットに相当するコンピュータプログラムを作ることである。そのようなものを作るためには、具体的な敬語使用の例を列挙して記憶させるだけではダメである。初めて体験する場面でも適切な敬語使用ができるためには、「理論」を組み込む必要がある。とすると、筆者の研究目標を、人間の敬語行動の理論的解明といってもいいことになる。

さて、このような筆者の立場から見渡すと、現在のところ聞き手に対する敬語について満足できる理論はまだないと判断せざるをえない。本稿は、上述の意味での「理論」を追求する一段階として、その骨組みについて述べようとするものである。

2. 聞き手に対する敬語行動のモデル

当面は、ある場面で適切な敬語表現を選択し発話する行動の理論を作ることが目標である。敬語理解の理論（モデル）は今後の課題とする。

敬語使用のモデルは以下の三つの部分からなる。

- (1) 場面の丁寧さを決定するモデル
- (2) 場面の丁寧さに基づいて、ある丁寧さを持った表現を選択するモデル
- (3) 表現の丁寧さを決定するモデル

敬語表現は多様であり、具体的な場面でただ一つの妥当な敬語表現を選択することはきわめて難しく、将来の課題になる。当面は、複数の敬語表現を適当な出現確率で選択・生成できるようなモデルを作る。これは、多人数の被調査者に特定の場面でどのような表現を使うかをたずねた結果を説明することに相当する。

そのようなモデルの妥当性を検証し、必要な箇所にも最も妥当な数値を当てはめることができたならば、そのモデルは今後の行動を予測する力を持つので「理論」と呼ぶことができる。ここでは、そのような意味での「理論」の前段階を提示する。

3. 場面と表現の関連のモデル

場面と表現を直接関連付けるモデルは、新しい（＝別の・未知の）場面に応用できないという点で「予測」に使えない。そこで両者をつなぐ概念として「丁寧さ」を考える。場面にはそれぞれ適当な「丁寧さ」が与えられており、表現にも適当な「丁寧さ」が与えられ

ている。そして、しかじかの丁寧さの場面には、かくかくの丁寧さの表現が選ばれると考
えるわけである。

場面と表現の関連のようすから場面の丁寧さと表現の丁寧さを求める方法については、
すでに荻野(1980.3)で述べた(荻野(1983)、井出他(1986)でも述べた)。この方法は、数量
化第3類と同じ結果を与えるものであり、この結果求められる「丁寧さの数値」が(個人差
を捨象した場合)場面と表現の関連を表わす「最適な数値」であることは岩坪(1987)に示
されている。

「丁寧さ」の構造を調べるために、場面と表現の関係を多次元解析してみても、「丁寧さ」
以外に意味のある要因は検出されなかった。すなわち、聞き手敬語については、「丁寧さ」
という一つの概念で説明でき、一次元解析で充分であることがわかっている(このあたり
は荻野(1983)、井出他(1986)などで述べた)。

従来の荻野の数量化の手法では、丁寧さの数値(井出他(1986)にしたがって荻野値と呼ぶ)
が場面と表現のそれぞれに計算され、場面の荻野値と表現の荻野値は相互の関係がまった
くなかった。これを関連付けることによって、場面と表現の関連のモデルが作られる。

ある場面で複数の表現がそれぞれ適当な確率で選ばれるモデルは、その内部に「ゆれ」
(「幅」と呼んでもよい)を含むようなものでなければならぬ。そのためには、以下の三つ
のモデルが考えられる。

- (1) 場面の丁寧さにゆれがあり、表現の丁寧さにはゆれがない
- (2) 表現の丁寧さにゆれがあり、場面の丁寧さにはゆれがない
- (3) 場面の丁寧さも表現の丁寧さもゆれがある

このうち(3)は、「ゆれ」のどの部分が場面の丁寧さのゆれで、どの部分が表現の丁寧さ
のゆれか、決定することが難しい。したがって当面採用しない。(1)と(2)は優劣が付け
がたいが、敬語使用のモデルとしては、(2)のほうが簡単なので、とりあえず(2)を仮定
しておく。

さて、場面の丁寧さは一つに決まると仮定した。それは「荻野の数量化の方法」による
場面の荻野値である。一方、表現の丁寧さは「ゆれ」があると仮定した。それを各表現が
どの場面で使われたかのパターンから求めるならば、場面の荻野値の平均(=表現の丁寧さ)
と標準偏差(=丁寧さの「ゆれ」ということになる)。

表1は荻野(1980.3)に載っているデータで、札幌市の503人にたずねた結果である。表
1の中の自然数は出現頻度で、六つの場面で四つの表現がどのように使われるかを示して
いる。それに場面の荻野値とそれから計算した各表現ごとの平均・標準偏差もあわせて示
した。

表1の出現頻度をグラフ化したものが図1である。

各表現に平均値と標準偏差が与えられれば、ごく普通に正規分布(=ガウス分布)を考
えることができる。ただし、それぞれの表現は使われる頻度が違っており、それは表1の右
端の合計欄の数値で明らかである。そこで、正規分布曲線を頻度で重み付けし、面積が頻
度に比例するように表わしてやることが考えられる。それを表示したのが図2である。図

(30) 聞き手に対する敬語行動の理論

表1 「知っている」の場面による使い分け

表現	場面							合計	
	5	1	2	3	4	6			
平均	1.000	1.757	3.655	4.550	5.717	6.000			
標準偏差									
シッテル類	2.0241	1.2547	438	371	164	90	10	4	1077
シッテマス類	4.4363	1.4166	39	110	280	279	243	195	1146
シッテオリマス類	5.1595	1.1574	7	17	39	88	142	143	436
ゾンジテオリマス類	5.6153	0.7397	1	3	9	31	98	148	290
合計			485	501	492	488	493	490	2949

※場面とは、以下のようなものをいう。

場面1 = 同じ年頃の親しい友人

場面2 = あまり親しくない人で、少し年下の人

場面3 = 親しい人で、少し年上の人

場面4 = あまり親しくない人で、少し目上の人

場面5 = ふだん言葉遣いを一番気にしないで話ができる相手

場面6 = ふだん一番丁寧なことばで話をする相手

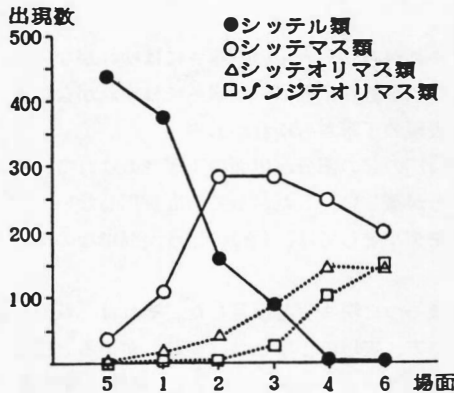


図1 「知っている」の場面差のグラフ

2は、図1を一般化したものとも考えられる。

図2では、縦に6本の直線が入っているが、これが六つの場面を表わしている。6本の直線と4本の正規分布曲線との交点は、それぞれの表現の出現確率である。この24の点を折れ線で結ぶと、図1が近似される。そこで、出現確率の合計が、現実の合計(表1の最下段の数値)になるように変換してやると、図2による「予測」ができる。結果は表2のようになる。

表2によると、このモデルは、現実に対するかなりいい近似になっていることがわかる。

また、図2で、6本の直線以外のところでも、任意の丁寧さを有する場面に対して、そ

表2 正規分布を仮定した場合の表1の予測

場面	5	1	2	3	4	6	合計
表現							
シッテル類	438:453	371:429	164:146	90: 39	10: 4	4: 2	1077:1073
シッテマス類	39: 31	110: 69	280:276	279:283	243:208	195:200	1146:1067
シッテオリマス類	7: 0	17: 2	39: 64	88:115	142:129	143:131	436: 441
ゾンジテオリマス類	1: 0	3: 0	9: 4	31: 48	98:150	148:155	290: 357
合計	485:484	501:500	492:490	488:485	493:491	490:488	2949:2938

※「:」の左側が現実の出現数値 (=表1)、右側が予測値

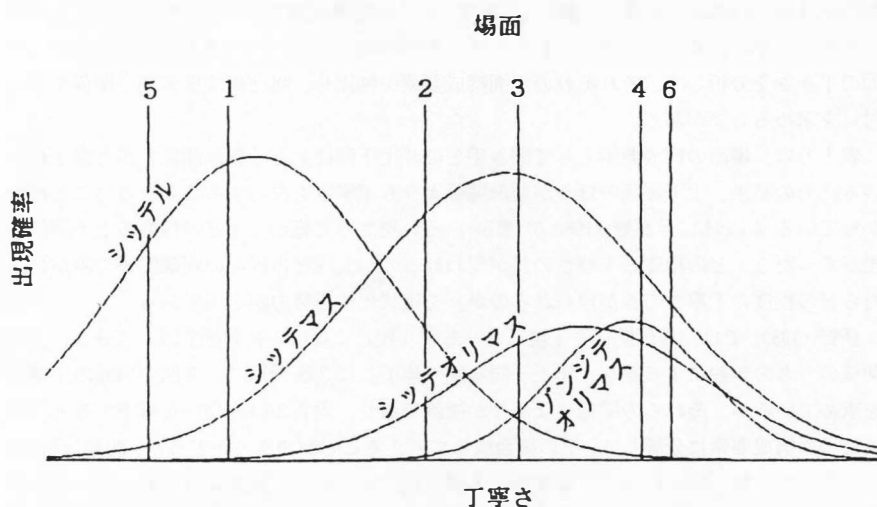


図2 正規分布モデルで近似した場面と表現の関係

の丁寧さの位置に直線を引けば、その直線と正規分布曲線の交点を求めることによって、四つの表現の出現確率を求める (=予測する) ことができる。

このように、場面の丁寧さは一つの数値に決まり、表現の丁寧さは「ゆれ」があると考えると、ある場面でさまざまな表現がさまざまな確率で現われるようすが再現でき、現実の敬語行動が反映されるとともに、未知の場面に対して表現の出現確率が予測できることになる。

さて、図2をみると、左右の端の部分は、いずれの曲線も「下」の方になってしまって、すべての表現が低い出現頻度になる。現実の調査でこういう場合を調べたわけではないが、これは「理論」が予測する極端なケースである。これにはさまざまの解釈がありうるが、ここでは、あまりに丁寧な場面とあまりに丁寧でない場面との両方で適切な敬語表現(言語

(32) 聞き手に対する敬語行動の理論

表現)ができなくなり、言語以外の手段が用いられることになる」と解釈しておく。

なお、図1の形を重視すれば、両端に壁があり、とりうる数値の制限があるとみることでもできる。すると、正規分布以外の分布を仮定することになり、それはそれで別の理論ができあがる。そのような理論では、現実には調査した中の両極端までが説明でき、その外側は理論のあずかり知らぬことになるだろう。ここでは、モデルの摘要の広さと理論の簡明さを重視して正規分布モデルを採用することにした。

4. 場面の丁寧さを決定するモデル

未知の場面に対して、それがいかなる丁寧さを持つかを決定することは、敬語行動理論の構築に重要な課題になる。その際、当面考えられることは、「場面」を、より小さな「場面構成要素」の組み合わせに分解し、「場面」と「場面構成要素」の関係を定式化することであろう。そのためには、すでにわかっている(=調査されている)さまざまな具体的な場面の丁寧さを分析して、それぞれの場面構成要素を抽出し、場面構成要素間の関係や重み付けを求める必要がある。

表1では、場面の構成要素として聞き手との「上下関係」と「親疎関係」が考慮されている。その結果、上下関係のほうが親疎関係よりも丁寧さを左右することが多いことがわかっている(くわしくは荻野(1980.3)参照)。それをさらに細かく「どの程度の上下関係の差があったら、どの程度の丁寧さの差が現われるのか」、「どの程度の親疎関係の差があったらどの程度の丁寧さの差が現われるのか」を定式化する努力が必要である。

荻野(1983)では、親疎関係を「親しい—あまり親しくない—初対面」に3区分し、上下関係のうちの年齢による差を「年上—同年齢—年下」に3区分して、9個の場面の丁寧さを求めているが、それらの関係はなかなか複雑であり、両者の絡み合いを考慮すると、単純に場面構成要素に分解して、その後合成して考えることができるかどうか、問題は残る。

また、井出他(1986)のように具体的な人物を設定するような調査からでも、データが数量的に処理されていれば、場面構成要素を抽出し、それによる分析をすることも可能である(その具体的手順については、ここでは省略する)。

場面は、「聞き手」だけに限定されるべきものではなく、もっとさまざまなものを含んでいる。それらがどのようにかわってくるかを解明することも今後の課題になるが、聞き手敬語の場合の本質は、聞き手と敬語表現の関連にあるとするならば、それらの課題は二次的なものになると考えられる。

5. 表現の丁寧さを決定するモデル

表現の丁寧さは、表1のようなデータから自動的に決定されるものであるが、それにも問題は残っている。表1では、出現した表現を四つに統合した結果を利用しているが、荻野の数量化の方法はマトリックスが小さい必要はない。むしろ、統合は一切しないままで計算したほうが情報ははるかに大きく、現実にマッチした結果になる。ここに示した方法でも、事情はまったく同じであり、表現のパラエティの統合はしないで、平均値と標準偏

差を求めるほうが望ましい(本稿では、わかりやすさを優先したため、統合しない場合の結果については省略した)。

しかしながら、このような計算をいくらたくさんしても、「調査した項目」についてだけしかわからないわけで、それでは「理論」にならない。「理論」を目指すためには、調査していない項目でも、さまざまな表現のパラエティについての「丁寧さ」が決定できなければならない(たとえそれが「近似」に過ぎないとしても)。

荻野の考える表現の丁寧さについては、荻野(1980.9)・荻野(1981)・荻野(1983)・井出他(1986)などに言及があるが、特に、井出他(1986)の「表現と丁寧度」(pp. 173-203)はもっとも広く調べている。それらはすべて調査の結果わかったことを列挙しているものだが、一応、一つの長い表現をその構成要素に分割した上で、そのどの部分が丁寧さになるかを求めることに成功している。構成要素の丁寧さをどのように考えるか、また、構成要素の丁寧さからどのようにして表現全体の丁寧さを計算するかは、まだ完全にわかってはいない問題である。単純な1次式ではまずいことは荻野(1981)ですでに述べた。井出他(1986)では、一つでも丁寧な要素があると表現全体の丁寧度が上がるが、二つ以上丁寧な要素が重なっても表現全体の丁寧度はさほど上がらないと述べた。これらの知見は、今後充分な定式化の中に活かされることになるだろう。表現全体の丁寧さとその構成要素の丁寧さとの関係の追求は、今後の課題であるが、充分可能であるという見通しを持っている。

なお、「3. 場面と表現の関連モデル」では、表現には丁寧さだけでなく、「丁寧さのゆれ」が存在すると仮定した。それを、具体的な調査結果から求めることはできるが、すべての表現に対して一般的に求めることは難しいように思う。乱暴に言えば、丁寧な言い方と、丁寧でない言い方の両極端で標準偏差を小さく仮定し、中間でやや大きく仮定するようなことでも近似できそうである。

さらに、表現の出現頻度の問題も残されている。調査した項目では、それぞれの相対的な出現頻度が簡単に求められるが、調査しない項目では、それはいかにして求められるか。この問題もなかなか難しいが、これまた乱暴に言えば、ある項目での知見を他の項目にそのまま当てはめることでも、かなりいい近似になりそうである。

こうして、ある有限の数の「丁寧さをなう要素」に対して辞書の中で出現頻度と丁寧さを規定しておき、それに基づいて、ある(複合した)敬語表現の出現頻度と丁寧さを決定することができると思う。

6. 話し手による違いについて

聞き手敬語の使い方には、話し手による差があることはすでに多くの調査が明らかにしている。聞き手敬語の本質を考えるならば、それは「聞き手に対する(丁寧さによる)表現の使い分け」であるから、話し手による敬語行動の違いは、場面構成要素のうちの聞き手以外のものと同様に、二次的なものと考えられる。ただし、総合的な敬語行動理論の構築のためには、無視してよいものとも思えない。そのようなものをどのようにして「理論」に取り入れるべきか。

(34) 聞き手に対する敬語行動の理論

今までの調査の経験では、日本語の敬語では、さまざまな話し手による違いのうち男女差が最も顕著に出てくる。そこで、男女差を例にしながら上の問題を考えていきたい。

敬語使用の男女差はさまざまなところに現われる。場面の位置付けの体系の違い(男性のほうが上下関係を重視することなど)、表現の好み(男女のいずれかだけがよく使う表現がある)、女性のほうが男性よりも一般に丁寧な言い方をするなどである。

それらの違いを反映する最も自然で最も簡単な方法は、男女それぞれに図2のようなモデルを作ることである。男女はまったく切り離された形になるが、これでも一応の形にはなる。

次に、荻野(1980.3)で提案した「表現の丁寧度は男女で共通だが、場面の位置付け方が男女で異なる」というモデルがありうる。しかし、このモデルだけでは、表現の好みの問題が扱えない。それを扱うためには、この第2のモデルも第1のモデルと同様の複雑さになりそうである。

話し手の属性による差は男女差だけに限定されるものではない。その他のさまざまな属性による敬語行動の違いについても同様に扱うことを考えると、第2のモデル(の拡張)のほうが応用がきくように思える。

7. 諸外国の敬語との関連

ここで述べた聞き手に対する敬語行動のモデルは、諸外国の敬語行動にもそのまま当てはまるものであろうか。

それを検証するためには、1言語ずつ、調査し、確認していくプロセスの積み上げが必要になる。日本語以外の言語については、まだ十分な確認ができていないわけでは、場面と表現の関係が単純な1次元の構造になっていけば、ここで述べたモデルが当てはまるといえそうである。過去の調査の経験では、アメリカ英語・中国語はこのモデルが当てはまるようであるが、韓国語は、(丁寧さだけでなく)聞き手の人物カテゴリーによる使い分けがあり、特定の人物には特定の表現が多く使用されるという現象がある。そのようなものでうまく扱うためには、このモデルをもう少し拡張する必要がある。ただし、狭義の聞き手敬語は(聞き手に対する)丁寧さに関係する部分だけをさすという立場もあり、そのような立場では、韓国語の上述のような現象は扱わないことになる。

8. まとめ

ここでは、聞き手に対する敬語行動の理論の骨格を述べた。全体としては、まだ「モデル」の段階であり、扱える範囲は狭いし、近似の程度も充分ではないが、骨格部分は、一応コンピュータプログラムとして表現でき、そのまま「実行」できるものである。今後は、より正確な敬語行動の予測を目指すとともに、場面の丁寧さを決定する理論・表現の丁寧さを決定する理論をきちんと定式化する必要がある。

また、敬語生成の対にあたる敬語理解のモデル・理論についても考えていきたい。

注：荻野(1988)は、具体的な調査から出発して理論を構築していく方法論について述べたもので、聞き手敬語の理論(モデル)についてはごくわずかに触れただけであった。その延長上に本稿があると考えられる。

謝辞：このようなことを考えるようになったきっかけは、井出祥子氏との議論によるところが大きい。本稿は、国語学会昭和63年秋季大会での口頭発表を補筆・改訂したものであるが、発表の前後に多くの方からさまざまな御教示をいただいた。個々のお名前は省略するが、ここに記して謝意を表する。

参考文献

- 井出祥子・荻野綱男・川崎晶子・生田少子(1986)『日本人とアメリカ人の敬語行動』南雲堂
 岩坪秀一(1987)『数量化法の基礎』朝倉書店
 荻野綱男(1980.3)「敬語における丁寧さの数量化」国語学第120集
 荻野綱男(1980.9)「敬語表現の長さ丁寧さ」計量国語学 Vol. 12, No. 6
 荻野綱男(1981)「敬語における使い分けの体系とその構造的関係」国語学第125集
 荻野綱男(1983)「待遇表現の数量化」水谷静夫(編)『朝倉日本語新講座5 運用I』朝倉書店
 荻野綱男(1988)「社会言語学の調査から理論にいたる道」言語研究第93号

——筑波大学講師——

(平成元年3月15日 受理)